

タイトル	世界ジオパークに日本3地域が国際認定		
掲載日	2009年10月15日(木)	掲載紙誌名	日本経済新聞
		掲載面	夕刊 9面

地球の成り立ちを学ぶ上で地質学的にとっても重要な地域を認定する世界ジオパーク(地質遺産)。京都大学学長だった尾池和夫国際高等研究所長(69)は日本ジオパーク委員会委員長としてもリーダーシップを発揮し、今年8月、加盟申請した3地域すべてで国内初の認定を勝ちとった。

8月下旬に中国・泰安市で開かれた世界ジオパークネットワーク事務局会議。日本から立候補した洞爺湖有珠山地域(北海道)、糸魚川地域(新潟県)、島原半島地域(長崎県)の関係者は直前まで気をもんだ。「まさかゼロはないと思うが、何地域が選ばれるだろうか」。3地域の申請は日本として認められる一杯を使った。ふたを開けてみると「3戦全勝」の結果に、みんながほっとした表情をみせた。

国連教育科学文化機関(ユネスコ)の支援で2004年に始まった世界ジオパーク。対象となるのは地層や火山、化石などの地質現象にとどまらない。鉱物などの歴史的な活用や防災まで幅広く、地球の活動と人類とのかわり全体にわ

日本の「地質遺産」国際認定へ奔走——尾池和夫さん



ニュースな
人ヒト

尾池氏は「地球を知り、好きになる教育に役立たい。エネルギーも資源も環境も、生命だって地球を知らなければ分からない」と意義を強調する。

地質学が専門だが、最初からジオパークにかかわってきたわけではない。日本委員会の設立に取り組んでいた関係者が、委員長就任を依頼するため京大理事長にたずねてきたのが昨年2月。「その場でやろうと決めた」と振り返る。

さっそく委員会の立ち上げに奔走し、必ずしも思惑が一致していなかった糸魚川などの地域や関連学会、文部科学省、環境省、経済

産業省など関係省庁をまとめ、昨年5月には第1回委員会の開催にこぎ着けた。「強引なところもあるから」と笑うが、「決断が早い。おかげでまとまった」と周囲の評価は高い。

自然保護を最優先し時には立ち入りも規制する世界遺産と違い、ジオパークは多くの人に自然に触れて活用してもらうことが前提になっている。教育や地域活性化の狙いをもつだけに、科学的な知識を備えたガイドの育成など受け入れ態勢の充実が加盟承認のカギを握る。

尾池氏は長年、科学者としてだけでなく俳人として

「科学の目」備え観光・教育

「日本人は自然を見る目を持っているが、アカデミックな理解は遅れている」と話す

も自然を見つめてきた。日本人は昔から自然を見る目を持っているが、アカデミックな理解は遅れている。独特の形をした海岸の岩を「びょうぶ岩」などと命名し鑑賞はしても、どんな種類でどんな性質の岩からできているかには興味を示さないという。

ジオパークをきっかけに科学の目を備えた観光や教育が定着すれば、より深い自然や地球の理解につながるという思いは強い。「自然の本質を理解して句を詠む。将来、そんなジオパーク俳句会をやりたい」。こんなユニークな夢も持つ。

加盟地域の多い欧州や中国は大半が安定した大陸だが、日本は火山や地震をはじめ今も大地がうごめいている。「日本の加盟が世界ジオパークに新たな1ページをつけ加えるだろう」

すでに来年の審査に向けた申請の準備も始まった。韓国や台湾、ベトナムなども加盟準備を進め、アジア連合をつくらうという動きもある。世界遺産に比べて知名度はまだ低いのが「科学の本質を見せるのがジオパーク」と力が入る。

(小玉祥司)